

原の辻遺跡(国の特別史跡)(彦岐市芦辺町深江栄触・他)

(原の辻一支国王都復元公園)

原の辻遺跡（はるのつじいせき）は、長崎県彦岐市芦辺町深江栄触・深江鶴亀触、および同市石田町石田西触にかけて存在する遺跡。2000 年（平成 12 年）には国の特別史跡に指定され、2013 年には出土品 1670 点が国の重要文化財に指定されている。

彦岐島東部・幡鉾川下流にある、弥生時代前期から古墳時代初期にかけての大規模環濠集落を中心とする遺跡である。魏志倭人伝に登場する「一大国」の国都とされている。一大国は一支国の誤記とされるが、誤記ではないとする説も存在する。

発掘調査

最初の遺跡発掘は 1923 年（大正 12 年）から 1926 年（大正 15 年）にかけて、地元の石田尋常高等小学校教諭・松本友雄による小規模なものであった。彼はこの時、弥生式土器や石器類を発掘している。

戦後の発掘調査

第二次大戦後の 1951 年（昭和 26 年）より 1961 年（昭和 36 年）の 10 年間に九学会連合・東亜考古学会により 4 回にわたる発掘調査が行われた。この結果、居跡や墓地が発掘され、貨幣や大量の鉄器等が出土した。

平成期の大規模発掘調査

以後も長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所を中心に調査が継続され、また、現在も調査は継続されている。1993 年（平成 5 年）の大規模な調査で三重の濠を巡らせた大規模な環濠集落、祭祀建物跡が検出された。また、濠の外西北では日本最古の船着き場の跡も発掘された。原の辻の中心部分に当たる。環濠集落の規模は東西約 350 メートル、南北約 750 メートルである。この東側に、魏志倭人伝に出てくる卑狗と卑奴母離などの役人の家や役所があったと想像される。濠の外の北、東、東南には墓地が見つかった。また、遺跡全体の総面積は 100 ヘクタールにも及ぶ広大なものである。

これらの発掘調査結果から 1995 年（平成 7 年）に一支国の国都であると特定された。

出土物に大陸系の品が多く、中国鏡、戦国式銅剣、貨幣などの中国の銭貨、トンボ玉、鑄造製品、無文土器、三韓系土器、楽浪系の土器など。後期にはこれらの量が増加した。

また、弥生時代中期の竪穴住居址から炭化した米、麦が出土している。島の河川流域の低地に水田が広がり、水稻農耕が行われていた。対馬に比較して水稻農耕が広く行われていた。島には貝塚もあり、シカ、イノシシ、ウマをはじめ獣骨や魚骨が出土している。石器では石斧・片刃石斧・石包丁に一部鉄器を交えるが、後期になうと石器はほとんど姿を消し、手斧・鎌・刀子など鉄器が豊富になる。なかには鉄器の原材料と想定できる板状のものがあり、これからさまざまな鉄器を造り出した。彦岐島の鉄器は舶載品であると考えられている。

史跡・特別史跡へ

遺跡は 1997 年（平成 9 年）に国の史跡に指定された。2000 年（平成 12 年）11 月 24 日には特別史跡となった。史跡公園が計画されているが、遺跡全体の公有化が進んでおらず現在既に発掘された場所は一旦埋め戻されたが、原の辻一支国王都復元公園として再整備されている。出土品は彦岐市芦辺町深江鶴亀触にある「彦岐・原の辻展示館」に収蔵されていたが同館は 2009 年（平成 21 年）8 月 31 日で閉館され、遺跡の北方に新しく建設された彦岐市立一支国博物館（2010 年 3 月 14 日開館）に改めて収蔵されている。なお、原の辻ガイダンスには、発掘調査の様子や代表的な土器などの出土品が展示されており、さらに観光・物産の紹介や彦岐神楽の見学もできるように整備されている。

Wikipedia による

